

あじさいⅡ

鹿角手をつなぐ親の会
情報誌
令和4年1月・第32号

目標をもって「寅イ」しよう！

国内ではコロナ感染が落ち着いてきていますが、昨年11月末にアフリカで新型コロナウイルスの新たな変異株（オミクロン）が見つかりました。

この変異株は感染力が強く、今使用されているワクチンは効きにくくなる恐れがあるとも言われています。

このため日本政府も水際対策を強化すると決定。こうした政府の対策を信頼し、コロナ感染が沈静化することを期待しつつ、新年は、これまでの三密を避ける生活を続けながら少しずつ以前の生活を取り戻し、無理の無い新たな目標をかかげ、希望を持ちながら「寅イ(トライ)」を続けましょう。

今年こそ皆様にとって良い年となりますよう皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。



情報交換・交流会を実施！

国民の日常生活や経済活動に大きな打撃を与えてきたコロナ禍も、ワクチン接種が進み、緊急事態宣言も解除されて北海道や首都圏をはじめとする大都市圏、沖縄の感染者などが大幅に減少してきていることから県内でも多数が集まる会議や会食等の規制がゆるやかになりました。

こうした現状を踏まえ、当会でも会議などの活動をはじめることとしました。

手始めに「コロナ禍における施設・GH利用者や自宅からの通所者の生活状況」についての情報を交換し、意見や要望をまとめる交流会を実施しました。

規制が緩和されたとはいえ、できるだけ密接を避けるため参加者を4名にしほり11月24日十和田毛馬内の「くらみせ」でおこないました。

4人の方々は久々の再会で近況を語り合いながら、コロナ禍における三密回避生活、外出(帰宅)制限などの自粛生活で本人も家族もストレスの発散方法に苦慮していること。

施設・GH利用者の消息、動向の情報を入手するのに難儀をしていること。などなど…

施設等を運営する側にもコロナ禍における利用者を守るための安全・安心確保対策に緊張感をもって取り組んでおられる現状を理解しつつ、当会としては会員のこうした切実な意見・要望をとりまとめた「要望書」を運営者に提出することとしました。

※コロナ禍。今は落ち着きつつありますが、新変異株の動向注視、ワクチンの3回目接種等まだまだ不安の種は尽きません。緊張感をもって対応しましょう！

神奈川県立の知的障害者施設

職員暴力で骨折、隠蔽か

令和3年9月27日
さがけ新報



一部の入所者をほぼ終日、施設した個室に閉じ込めている実態が明らかになった神奈川県立の知的障害者施設「中井やまゆり園」（同県中井町）で、2年前に職員が入所者に暴力を振るって骨折させたのに、事故として隠蔽した疑いのあることが26日、複数の職員への取材で分かった。

同園は「事実関係を確認したい」としている。職員らによると、2019年7月、施設内の床に横になっていた20代の男性入所者に対し、男性職員が「邪魔だ、どけ」と言って、洗濯物などを運ぶカートを肩に強くぶつけた。入所者が後日、医療機関で診察を受けると、鎖骨が折れていた。

カートをぶつける様子を目撃した職員もいたが、園は「寝転がっていた入所者を、他の入所者が踏んだことが原因と推測される」と、事故扱いにして処理したという。

問題の職員は19年11月に別の入所者を踏みみつけるなどの虐待をしたとして、今年1月に減給処分を受け、その後異動した。

同園は19年11月の虐待を受け、20年6月に「虐待防止マニュアル」を策定。入所者がけがをしているのを見つけた場合は「確認・情報共有シート」に記入することになっている。だが、取材に応じた職員らによると「書類仕事が増えた」と不満が出ており、徹底されていないという。

障害のある子と家族 笑顔の写真

無職（東京都 33）

ダウン症などの障害があるお子さんと親御さんを撮影したフォトグラファー、葛谷舞子さんの写真展へ足を運びました。温かさあふれる優しくて美しい作品が、たくさん展示されていました。

モノクロでしたが、人の笑顔や命の尊さ、重みを写し取るのに、色彩はさほど重要ではないと感じました。色合いは見る側が想像すればいいこと。それより、一枚一枚の写真のもつエネルギーに引きつけられました。自由なポーズにリラックスした柔らかい笑顔。見ていて、ほおが緩んだり心がポカポカしてきたり。

障害をもつて生きることは、当事者にもその家族にも大きな苦労や痛みが伴うと思います。写真に添えられた言葉には、お子さんが障害者とわかった時のご家族の悩む声もありました。それでも写真からは、それを乗り越えたり、すべてひっそりめて生きようとしたりする姿が伝わってきました。まぶしいくらい強烈な光を放っていました。

障害の有無にかかわらず、生きることは誰しも、喜びも苦しさもあると思います。丸ごと受け入れ、笑顔で生きる人の尊さをたくさんのご家族の写真から受け取りました。

切り抜き帳から

障害 もっと身近に捉えたい

中学生（東京都 13）

私には障害のある幼なじみがいた。小学生の時、その幼なじみを見て友達が「かわいそう」などと言ったのを聞き、なぜそんなに他人事なんだろう、と疑問に感じたことを今でも覚えている。

ただ、自身や家族が障害者でもない限り、自分事として捉えるのはすごく難しいことだ。例えば、東京都の調査では、都の障害者差別解消条例について「知らない」と答えた人は6割半ば、「名前のみ知っている」は2割半ば、「内容も知っている」は1割未満だったことから分かる。

しかし現在、障害者数は国内総人口の約7%とも言われている。私たちは、障害者と共生する社会をさらに目指す必要があると思う。また、障害を他人事ではなく、もっと身近なこととしてとらえるよう周りにも広めていきたいと思う。

娘の温かいサードプレス

児童指導員（東京都 58）

ダウン症の娘は、数年前からカフェで働き、グループホームで暮らしている。人との関わりが好きで、毎週火曜日に大きなコーヒESHOPPに立ち寄ることを楽しみにしている。

先日、娘の職場の職員さんが、そのコーヒESHOPPで商品を買わずにくつろいでいる娘を見かけたという。それを聞き、私は謝罪するため喫茶店に伺った。娘は火曜日の仕事帰りにうれしそうに商品を買って飲んでいくこと、その他の日も店員さんのおしゃべりを楽しんでることを、店長さんが教えてくれた。店長さんは、職場でも家でもない居心地の良いサードプレス（第三の場所）はとても大事で、それを娘に提供できているということがうれしく語ってくれた。「これからも楽しみにお待ちしています」の温かな一言が私の心に深く響き、気持ちがあふわっと軽くなった。